

# ネパール、タカリーにおけるエスニシティの変容と展開

森田 剛光

はじめに

## I. 変容するタカリー社会

### 1. タカリー研究

## II. 二つの歴史の変遷

### 1. 塩の交易の時代

### 2. 世界システムへの包摂の時代

## III. タカリーの社会組織と社会構造

### 1. 親族組織

### 2. 社会組織

### 3. タカリーの社会構造

## IV. ネパール化、グローバル化の中で

### 1. 多民族ヒンドゥー社会

### 2. 価値観とまなざし

### 3. エスニック境界の拡大

### 4. エスニック・アイデンティティと民族範疇

## V. おわりに

キーワード：ネパール、エスニシティ、民族  
範疇、境界

はじめに

近年、ネパールはますます混迷の状態にある。政治、社会の安定が図られるよう様々に試みられているが未だ出口が見えないでいる。その問題の根底に、日々の暮らしを営む人々と政治・社会との相互関係にある。多民族、多文化で構成されているネパールの複合社会の中で生きる人々に対してエスニシティの視点を導入するこ

とは、ネパールが抱える問題を考える上でとても重要である。

エスニシティの定義は、研究者ごとに大きく異なる。エスニシティという言葉はマイノリティの政治的要求の噴出を契機に従来の人種、民族、部族といった用語にとって代わり用いられるようになっていく。エスニシティは、エスニック・アイデンティティの形成と不可分で、フレデリック・バルト[Barth1969]は、複数の民族集団が隣接居住することでその成員が互いの境界を越えて交流、相互交渉を重ね形成構築される心的な規準として、エスニック・アイデンティティの重要性を説いた。これは集団の境界が、集団間の相互行為の産物であり閉じた固定的なものではないことを意味し、エスニシティの視点の持つ重要性は、集団を動態的で、政治的な存在としてエスニック・グループとして従来の「民族」よりもより柔軟に扱うことにある。綾部恒雄[綾部1993]は、このエスニック・グループを「国民国家の枠組みの中で、他の同種の集団との相互行為の状況下にありながら、なお、固有の伝統文化と我々意識を共有している人々による集団」として定義づける。これらエスニック・グループに関する概念を下敷きに本稿は、西北ネパールの商業民族として広く知られるタカリーの社会組織と社会構造の変容過程を取り上げ検討し、タカリーに表出するエスニック・マイノ

リティとしての自存戦略とそれに伴う問題の一面をきりとろうとするものである。なお、タカリーを取り巻くエスニシティ境界については後述するが、本稿で扱うタカリーは、一定の民族的範疇の混乱を避けるため、4つのクラン、ゴウチャン、トラチャン、セルチャンとバタチャンに属し、自称タマン (*Thaman*)<sup>(1)</sup> およびタパン (*Thapan*) を名乗る人々のみをタカリーと表記し限定して狭義に扱う。

## I 変容するタカリー社会

### 1. タカリー研究

本稿でとりあげるタカリーに関する研究は、河川慧海がその著書『チベット旅行記』によって初めて世界に紹介した。しかしながら、タカリーの研究は実質上、1951年以降はじまる。これはネパールの多くの民族誌的研究が鎖国政策転換後に始まり、それ以前はほとんど進んでいなかったことと関係が深い[月原1999: 45]。タカリーに関する研究は、蓄積され<sup>(2)</sup>、1951年の鎖国政策転換直後からチベット動乱前後のヒマラヤ探検初期の研究群、そして1960年代から1980年代後半までの初期の調査・研究の補完と急速なネパール化、都市化の中での文化変化、変容に関する研究群とに区分できる[森田2007]。しかし1980年代後半から研究者の高齢化、関心領域の変化によりその数は激減し、近年大きく変貌するネパール社会の中でのタカリーの様態

について調査研究は、ほとんどなく、民族誌的空白が見られる。

## II 二つの歴史的変遷

### 1. 塩の交易の時代

タカリーは、歴史的に外部との接触によって直面する政治状況に自らを積極的に適応させてきた。タカリー社会の歴史的変遷は、塩の交易に従事した時代、グローバルな社会に包摂される時代の二つに大きく区分できる[森田2004]。

18世紀の南アジアは、東インド会社が進出し、ムガル帝国が急速に力を失い、各地に藩王国が乱立する。1720年、清はチベットに兵を送り宗主権の下においた。またヒマラヤ山岳地域では、征服や婚姻によって原住民を従えラジャを称するものが現れ、各地で土候国を形成する<sup>(3)</sup>。その土候国のひとつゴルカ<sup>(4)</sup>は、ネパール統一に向けて覇権を駆けつづけた。

第2次ネパール・チベット戦争(1855年～1856年)時、タカリーの指導者の一人カル・ラム・ティムツェン (*Kalu Ram Timtsen*) が、ネパール側のエージェントとして活躍した功績から、ネパール政府よりスッパの称号と徴税権、塩の独占的取引権を獲得する<sup>(5)</sup>。チベットの影響を強く受けていたタッコラ地方は、ネパールの領土に完全に組み込まれた。

このタッコラ地方<sup>(6)</sup>は、自然の境界壁として機能する7,000メートルを超えるヒマラヤ主

(1)ネパール国内の別の民族タマン(族)と区別する。

(2)川喜田二郎、高山龍三、飯島茂といった日本の研究者以外に、トニーハーゲン、ジュゼッペ・トッチ、C・フォン・ヒューラー＝ハイメンドルフ、ドゥル・バハドゥール・ピスタ、アンドリュウ・E・マンザルド、コルネイル・ジュスト、ドナルド・A・メッサーシュミット、ウィリアム・フィッシャー、マイケル・ビンディングなどのヒマラヤ地域研究を作り上げてきた錚々たる研究者らが名を連ねている。

(3)11世紀後半から14世紀末にかけ、西ネパールのジュムラ地方 (*Jumla*) を中心にカーサ (*Khasa*) 王国が支配をしていた。分裂崩壊の後いくつもの土候国が生まれる。土候国は[西澤1985: 7]。大小さまざまで小

さいものは村落レベルであり、どこにも属さない地域もあった。

(4)カトマンズの西のゴルカ (*Gorkha*) を本拠地にしたことに因む。今日に続くネパールの王室は、この王朝は流れをくむ。

(5)スッパは、ネパール全土に見られ、中央政府から任命を受け警察や徴税を担当した[西澤前掲載: 43-44, Messerschmidt1974]。

(6)西北ネパール、ムスタン王国 (*Mustung*) と北接し、ネパールの首都カトマンズからは西北に約300キロにあり、アンナプルナ連峰 (*Annapurna*) とダウラギリ連峰 (*Dhaulagiri*) に挟まれ深くえぐれたカリガンダキ溪谷の上流部に位置する。タッコラの

嶺をさけ、比較的容易にネパールの北側チベット高原へと抜けることができる数少ない場所として、インド・ネパール・チベットを結ぶトランス・ヒマラヤの交易路が通る地域であった。

タカリーは、徴税を請け負うことで、それまで自由に交易に従事していた周辺地域の人々を傘下に組み込み、問屋的な仲介による交易システムをタッコラ地方のトゥクチェ (*Tukuche*) を中心に確立した。スッパの経済的、政治的影響力は、ティムツェンの子孫に継承され、スッパ・ファミリーを形成する。タカリーは、塩の独占的交易権によって莫大な経済的影響力を備え、スッパは、タッコラ地方を支配した。ネパール政府は、タッコラ地域のネパールによる政治的支配を確固たるものと目論み、タカリーは、政治的、文化的な仲介者として重用した[飯島1982: 73]。1930年代始め、スッパ・ファミリーの一人が、ネパール政府によって南部のタライ地方の財務長官に任命・赴任した後、南方低地<sup>(7)</sup>にも経済活動を拡げ、インド国境からチベットに至るタカリーによる通商ネットワーク、タカリーの経済圏が形成される[同前: 87]。

しかし、ネパールは、1951年海外に門戸を開いた結果、第二次世界大戦後の冷戦構造における中国・インドの南アジア覇権争いにまきこまれ、地理的に両陣営の中間に位置することから多額の援助を呼び込み、空港の他に、インドとカトマンドゥを結ぶ幹線道路などインフラが整

えられた。幹線道路で結ばれたことでインドから安価な海産塩がもたらされ、チベット産出の岩塩の価格は暴落する。もっとも1928年既にタカリーのもつ塩の独占的交易権は廃止されていたが、タカリー経済は、大きな打撃を受けた<sup>(8)</sup>。さらに1959年のチベット動乱後、ヒマラヤ国境は全面的に封鎖され、ヒマラヤ越えのチベット交易ができなくなる。国際政治の変動を受け、タカリーは生活基盤を新たに求めて、次々と南方へ移住し、塩の交易は衰退する。

## 2 世界システムへの包摂の時代

ネパールは、1950年代から1960年代にかけ、ヒマラヤの8,000メートル峰の登頂を挑戦する人々の注目を集めた。一時期、中国とインドの外交問題で制限されていたヒマラヤ山岳地域の入山が1969年解禁をうけ<sup>(9)</sup>、探検家、登山家だけでなく多くの人々がネパールを訪れ、登山、トレッキング・ツーリズムが勃興する。観光産業<sup>(10)</sup>は、海洋に面せず空路以外では、第三国を経由なしに貿易を行えないネパールに直接的に外貨獲得の大きな機会を与えた<sup>(11)</sup>。

タカリーは、塩の交易の衰退後、新たな経済的基盤を求め、タッコラ地方を離れ、都市部に移住した。この時期、先住のヒンドゥー系住民が既に経済的基盤を築いているなか、新たな参入は困難であったが、観光業を中心に第三次産業に進出し成功していった[飯島前掲載: 118-

Thakはもともとチベット語の*mtha*に由来し、「終わり」、「境界」を意味している。伝統的には3つの地域に区分される①タクサットサエ (*Thak sat sae*)、②パンチ・ガウン (*Panch gaun*)、③バーラ・ガウン (*Bara gaun*)。

(7) マラリア撲滅政策を伴う移住奨励が行われる1960年代以前は、山岳地域に住む人々は、低地に多くあった森林はマラリア流行地帯と恐れ嫌った。

(8) 「トゥクチェにおける塩の値段は、約二十五パーセントも下落した」[飯島前掲載: 112]。

(9) 1962年に中華人民共和国が、相次ぐ難民の流失や中国に対するゲリラ活動などを阻止する名目で、ヒマラヤ国境の全面封鎖を行った。

(10) ネパール人と観光産業の関わりは古く、19世紀、ヒマラヤ周辺のヒル・ステーションと呼ばれる小都市郡へネパールからの出稼ぎ、移住労働者多数いたことが報告されている[鹿野1986: 270, 日限1998: 374]。

(11) 1980年代半ばから、カーベット産業や既製服縫製産業の輸出額がのび、ツーリズム産業の占める割合は減少しているが、依然として重要な外貨獲得手段である。ただ、1996年以降マオイストの活動に加え、2001年のネパール王室殺害事件、同年のアメリカ同時多発テロ以降の世界的なテロに対する姿勢の変化にともなって、軍隊、警察組織との衝突がますます激化し、治安の悪化、政治情勢不安が観光客を減少させる事態を招いている。

119]。その一つが、交易で培った商法<sup>(12)</sup>と資金をもとにしたホテル経営である。タカリーは、ポカラ (Pokhara) において、1960年代にホテル業に既に参入している。1962年政府のツーリストセンターができ、4件のホテルが開業している。うち3軒のホテルがタカリーの経営であった [森本1998: 281]。タカリーは、自らホテルの滞在者、観光客の通訳や案内といった観光客のニーズに応える代行を行い、ツアー会社が対応しないような個別的な事柄にも対応していった。タカリーは、ホテルやロッジを経営を通じて、観光の場を通して外国人と接する機会を増加させた。タカリーは、観光産業、ホテル業に進出した結果、観光客とネパールを結ぶ窓口となり、タカリーは、観光仲介者、ミドルマンとなった [森田2004]。しかし、1996年以降マオバディ<sup>(13)</sup>による郡庁、警察署、発電施設などに対する破壊工作や襲撃などの反政府活動の活発化、2001年のネパール王室殺害事件とネパールはその後も政治と社会の不安を抱え、2001年9月11日アメリカ同時多発テロ以降にみられる世界的なテロに対する姿勢の変化にともない軍隊、警察組織との衝突がますます激化し、諸外国からの観光客は減少し、観光産業は危機に直面した。

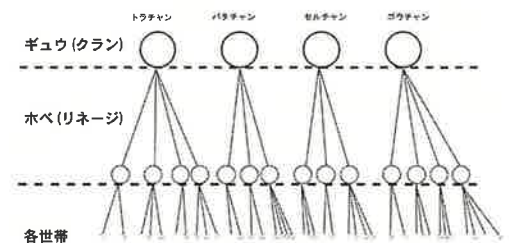
一方で、特にネパール国内の政治経済的不安から、海外に向かうネパール人出稼ぎ労働者が急増している。2001年の統計によると国外に居住するネパール人は全体の3.4%にあたる76万人である。そのうち77.3%にあたる約59万人が、ビザの必要ないオープン・ボーダーであるインドに在住している。その次に多いのがサウジアラビア、カタール、アラブ首長国連邦といった中東湾岸諸国である。湾岸諸国への居住者は、11万人にもなり、全体の14.5%を占めている。

湾岸諸国への出稼ぎの増加要因は、90年代の政府間の人材派遣締結による集団的、組織的な労働移動が可能となったためでもある。日本にも多くのネパール人が居住し、マレーシア、香港、北米について第9位、3726人とある<sup>(14)</sup>。ビザ所持者、オーバーステイを含めて日本に2000年現在、約6千人前後のネパール人が居住しているといわれる。中でもタカリーは、早時期から日本に進出し、タカリー民族協会支部を東京や名古屋に設立した。2007年の筆者の調査では、アメリカへの進出が顕著になっている。

### Ⅲ. タカリーの社会組織と社会構造

#### 1. 親族組織

タカリーは、ギュー (Ghyu) といわれる四つの外婚クランを持ち、下位カテゴリーとしてホベ (Phobe) といわれる家族群に分かれる。ギュー、ホベともにリネージュを基本とする血縁集団である。ホベは、夫方集団をさし、妻方集団は、マイティ (Maiti) といわれる。タカリーは、夫方の連帯を優先重視する父系的な親族組織を持つが、妻方・母系との絆も強くそなえている。



婚姻は、同一のホベでは行わず、そのホベの属するギューと別のギューの者で行われる。つ

(12) 交易路の簡易宿・食堂であったバッディ (buddi) の経営はタカリーの交易活動を支えると共に女性達の収入源にもなった。

(13) 反政府武装組織マオイスト (ネパール共産党毛沢東

主義派) の通称。

(14) この統計は留守家族による自己申告で、実際の海外移住者数はもっと多いと推察される。

(15) 2006年の筆者による調査では、ホベは45あるという。

まり同じギュウ同士は婚姻関係を結べない。タカリーは、婚姻相手を母方のいところをもっとも良いとされている。近年、婚姻関係を結ぶ際、経済的な側面よりも、家柄を重視する傾向や呪術的影響を嫌忌する傾向も時折見られる<sup>(17)</sup>。加えて近年は教育レベルの高さを意識する傾向が強く現れている。

各ホベは、それぞれ固有の名称を持つ。ホベの名称は、慣例的にそのホベに属す年長のものが行うとされる<sup>(18)</sup>。ホベは、恒常的に固定化した集団ではなく、分裂、合同することで頻繁に変動する。ホベの分裂は、属している世帯数が増加し、各種社会的行事に全員参加やホベ内の意思統一が困難になった場合に起こる。また、ホベの分裂は、親族関係の悪化によっても生じる。小さいホベは、8世帯ほどが属し、大きいホベでは100世帯以上が属している。ホベの成員の老齢化により後継者がいなくなるとそのホベは消滅する。しかし、事前にホベ同士同意のもと合同し存続を図られる。ホベの合同は、原則として最後に分化したホベと合同する。カトマンズやボカラのタカリー民族協会が発行する電話帳は、ホベごとにまとめられ、ホベが、タカリーのもっとも基本的な社会集団の単位となっている<sup>(19)</sup>。

## 2. 社会組織

### a) 13名村長会議

テラ・ムキヤ・パンチャヤット (*Tera Mukhiya Panchayat* : 13名村長会議) は、ムキヤ制度をもとにタカリーが独自に発展させた

社会組織で、ムキヤの連合組織である。13名村長会議は、定期的な会議や年中行事の開催と準備を行うほかに、タッコラ地方のタカリー社会内部での紛争の調停などを行う。

13名村長会議は、議長にメル・ムキヤ (*mir mukhiya*)、副議長にウパ・メルムキヤ (*upa mir mukhiya*)、書記、財務担当にタービル・ムキヤ (*tabil mukhiya*) という役職がおかれ、一村に一人のムキヤがおかれる。各ムキヤ達の下には、グンダール (*gundal*) というサポートの役の人々が配される。13名村長会議の役員の任期は一年であった[Vinduing1992: 23]とされているが、近年タッコラ地方では人材不足のため、任期は伸びる傾向にある。ムキヤ制度は、タッコラ地方がネパールに取り込まれる以前からネパールで広く存在した制度で、徴税、裁判、土地の登記などを担ってきた。ムキヤ制度は、1960年マヘンドラ国王が廃止し、現在はネパール政府機関の役割も権限も持っていない。

### b) タカリー民族協会

タカリー・セワ・サミティ (*Thakali Sewa Samiti* : タカリー民族協会)<sup>(20)</sup>は、明文化されたタカリー憲章に基づく民族協会規定を掲げ、年一回の総会を行い、予算報告や各支部から出された提案などを討議する。NGOとしてSWC (*Social Welfare Council* : 女性・社会福祉・スポーツ社会福祉局) に認定を受けネパール政府に公認された団体である。各地に散らばったタカリーの相互扶助を目的とする。

(16) 親族内で問題が発生した場合、あくまでホベを中心に問題解決が図られるが、マイティ側にも相談が頻繁に行われる。

(17) 婚姻の際、「あのホベのあのばあちゃんが性格悪いのは呪術の影響だ」と決めつけ、あのホベの人と一緒にするのは良くないと直接的に言う場合が見られる。この他、暴飲の理由も呪術とされる場合がある。

(18) あるホベは、最年長者がラマ僧 (*Lama*) であった

ことから、ラマ・ホベ (*Lama Phobe*) と名付けられたという。

(19) お葬式で喪に服すもっとも近い親族のことをテラ・ズネ・ダス・バイ (*Tera Zune Das Bai*) といい、この範囲の親族はとりわけ、様々な義務と責任を負う。

(20) ネパール語直訳は「タカリー奉仕協会」であるが、その役割は民族協会であるためこの語を当てる。



タカリー民族協会は、ネパール国内では、カトマンズ本部の他に、タサン(*Thsang*)、カトマンズ支部、チトワン(*Chitwan*)、ダルバン(*Darbang*)、ダンガリー(*Dhangarhi*)、ネパールガンジ(*Nepalganj*)、ポカラ(*Pokhara*)、バグルン(*Baglung*)、ビレタンティ(*Birethanti*)、ブトワル(*Butwal*)、ベニ(*Beni*)、バイラワ(*Bhairawa*)、ムグリン(*Mugling*)、ダナ(*Dana*)、ブルティバン(*Burtibang*)、ジョムソン(*Jomsom*)の計16支部がある。さらに海外では、香港(*HK*)、アメリカ(*USA*)、韓国(*S. Korea*)、イギリス(*UK*)、オーストラリア(*Austraria*)、日本(*Japan*)、ベルギー(*Belgium*)に7つの支部を持っている。ネパール国内各支部の広がり、ネパールの西部、中部を中心とし、タッコラ地方からポカラを経て、インドへ抜けるかつての塩の交易路沿いと、ポカラとカトマンズを結ぶ幹線道路沿いに配置され、ネパールの東部への進出はみられない。各支部に青年会、婦人会有る。

### 3. タカリーの社会構造

現在タカリーは、故郷であるタッコラ地方を離れ各地へ、親族のつながりと、タカリー民族協会の支部を利用したチェーン・マイグレーションにより広がっている。タカリーの社会組織からタカリーの社会構造をみると、複雑な移住過程の歴史と無関係ではない。もともとタッコラ地方のタカリー居住地域一帯は、タクサセ地域(*Thak sat sae*)と呼ばれ、さらに三つの地域に細分化される。前述したように塩の交易の中心であったトゥクチェーはプレトゥバ(*Pretuba*)と呼ばれ、カンティ、コバン、ラルジュ

ン一帯はチャティトゥバ(*Chatituba*)、それより南をドゥトゥバ(*Dutuba*)と呼んでいた。各地域には社会的政治的格差があり、トゥクチェーのあるプレトゥバはスッパ・ファミリーを中心にタカリーの有力者達が居住し、タカリーの発祥地であったチャティトゥバよりも上位に位置づけられていた。タッコラ地方のタカリー居住者の減少により変化した、タカリーの年行事のファーロー(*Phalo*)の祭りの中で重要な役割を担うショーペン(*shopen*)と呼ばれる少年達の選出先にも表れていた。近年までドゥトゥバの人々は参加を許されていなかったという。また、タッコラ地方の南部に位置するミャグディ地方のタカリーの人々はタッコラ地方よりも社会・文化的に一段低く見られていた節がある<sup>(22)</sup>。

一方、タカリー民族協会も成立の経緯と地域差により均一な社会組織ではない。1954年、ポカラへと移住したタカリーの増加にともない、ムキヤ制度が導入される。ポカラのムキヤ達の指導のもと、タカリーの共有地として土地を購入される。そしてポカラのムキヤ達は、ムキヤ制度を廃し、組織の近代化をはかる。1983年カトマンズにタカリー民族協会の全国本部が出来き、先駆的であったポカラの協会は、ポカラ支部へと移行する<sup>(23)</sup>。その後各地に移住したタカリーをまとめるタカリー民族協会の各地支部が設けられる。しかし、各支部と本部間には少なからず摩擦が生じている。ポカラ支部は、本部より先に社会組織の近代化を図ったという歴史性に対する自負に加え、資産の多いポカラ支部は本部との独立性についてしばしば議論される<sup>(24)</sup>。

また、タッコラ地方のタカリーの人々は、

(21)SWCはネパール政府のNGO、NPOの監督省庁である。SWCに登録されることで公的なNPOとして活動できる。

(22)タッコラ地方に債務を抱えた者、犯罪を犯した者などが移住したとされる。

(23)1954年にポカラにタカリー・サマージ・スンドル・

サンガ(*Thakali Samaj Sundhar Sangh*: タカリー民族社会改革機構)が設立される。タカリー・サマージ・スンドル・サンガはタカリー・セワ・サミティ設立後、ポカラ支部となった。

(24)SWCの法令の下、登録された団体は本部が全ての業務を取り仕切るトップダウンの構造をしているため、

タカリー民族協会タサン支部があるにもかかわらず、13名村長会議をより信頼し、自分たちの社会組織として帰属性を見いだしている事例があげられる。現在、在任中のメル・ムキヤは、タカリー民族協会タサン支部の会長を兼任し13名村長会議のムキヤたちの多くがタサン支部の役員を兼任しているという人材不足の事情もあるが、多くの役員は、大会本部の会議や日常において民族協会の役名よりも、13名村長会議の役名で呼ばれていることから推察される。13名村長会議とタカリー民族協会という統合を担うべき社会組織を併存させている。すでにムキヤ制度は、ネパール政府機関の役割を終えている。しかし、13名村長会議の成員はタッコラ地方のタカリー社会内で役割を長年担ってきたことを理由に、タカリー民族協会一つに社会組織を統合させずにいる。タッコラ地方で2006年9月行われたタカリー民族協会の総会にて、13名村長会議の代表メル・ムキヤが、高齢を理由にすべての職の辞意を表明し演説をした<sup>(25)</sup>。

今後、各支部と本部との意識の差異、各支部内での世代間、出自を含めた地域間の帰属意識の温度差はより顕著なものとなり、ますます問題が表面化していくことになると考えられる。

#### IV. ネパール化、グローバル化の中で

##### 1. 多民族ヒンドゥー社会

ネパールは、多くのエスニック・グループ、カースト、言語、宗教的コミュニティから構成される文化的に多様な国家である。ネパールには60のカースト・エスニックグループと70の言語と方言が存在するといわれ、「アジアの民族博覧会場」[Hagen1980:91]と表される。ネパー

ルは、多数のカースト、エスニック・グループで構成されている。個々にエスニック・グループの全体に占める割合を見るならば、最大集団のチェトリでさえ16パーセントを占めるにすぎず、一つエスニック・グループのみが多数派を占めているわけではない。しかし、ヒンドゥー系に括られる人々の総計は、全体の86.5パーセントに達し、ヒンドゥー的価値体系が支配的である。その特徴としてジャート(Jat)というものがある。ジャートは、ネパール語で「民族」に相当する言葉であるが、同時にカーストも意味する。ジャートの語彙の使用に当たって、民族とカーストの区別は原則的にはない。特に1854年に定められた法律ムルキ・アイン(Muluki Ain)によってこのジャートは顕在化する。ムルキ・アインはジャートによって人々を区別し、多民族で構成されたネパールを支配する装置として機能し続けている。現在も人々に深く影響して続けている。ムルキ・アインは、ネパール全土の各「民族」が一つの大きなカースト・ヒエラルキーに取り込み、集団内部にカースト的ヒエラルキーを持たなくとも、ネパール社会という大きな枠組みの中では、各エスニック・グループは否応なしにカースト・システムの中に位置づけられてしまう。

##### 2. 価値観とまなざし

マジョリティを占めるヒンドゥー系住民の価値観は、様々なところで顕在化し、ヒンドゥー系の人々によるチベット系の民族に対するまなざし(stigma)がはたらく。ヒマラヤ山岳地域の北方高原に住むチベット系、モンゴロイド系の人々を、一般にボテ(Bhote)と呼ぶ<sup>(26)</sup>。ボテは単一な民族集団を構成しているわけではなく、前述のムルキ・アインによって多くのヒマラヤ山岳地帯

↘ 支部に何ら問題がなくとも本部の活動状況により支部までが資産没収の対象になる。

(25)代わる者がいないため、同じ人物がメル・ムキヤを継続している。

(26)1960年代以降大量に流入してきたチベット本土からのチベット人難民はボテとは呼ばれず、一応の区別がなされている。

に住むチベット系、モンゴロイド系の人々が各集団の民族意識や文化的な差異をあまり考慮されないうまま括られている。

これは、国家や支配的なマジョリティが、個々の文化や集団の権利やエスニック・アイデンティティを尊重せず、無視し、自ら多少とも恣意的に設定した特定のカテゴリーに複数の従属的な小集団を括ってしまう行為である。ヒンドゥー高カーストの平地に住む人々は、山岳に住む人々に対して、文化的、宗教的な価値観が異なっていることから、彼らを自分たちのカーストよりも低位に位置づける<sup>(27)</sup>。

『ボテ』という名前の拒否は、ヒンドゥーの文化的影響を強く受けた人々の間だけでなく、チベット仏教を信仰し、チベット系の言語を話す人々の間にも見られ、自分たちを劣位に位置づけようとするヒンドゥー高カースト視線に対する反発という側面がある」[名和1997: 53]。そのためヒマラヤの山岳民族は侮蔑含むボテとよばれることにおおむね嫌悪感をもつ。

タカリーは、ボテと同一視されることを嫌い、それまでのチベットのスタイルを変え、脱チベット化を推し進め、チベットの習慣をさまざまに禁止していった。タッコラ以外の土地でのタカリー語の使用制限、チベット服の着用を禁止とネパール服着用の奨励、ボテと呼ばれる原因となるヤクの肉の食用禁止をはかり、ヒンドゥー高カーストがお酒を飲まないことにならう、チャン(chang: にがり酒)を常用することもやめた。このようなタカリーの主体的なヒンドゥー化の努力は、ゴードンの同化理論[Gordon1964: 40-41]にそえば、文化同化(culultural assimilation)といえる。

さらにタカリーの変革は、社会構造にまで及ぶ。伝統的な自分たちのチベット・ビルマ語系の氏族名をインド・アーリアン語系のヒンドゥー風に改め、ティムチャン(Timchan)氏族はセルチャン(Sherchan)氏族に、ブルキー(Bhurki)氏族はバタチャン(Bhattachan)氏族、サルキー(Salki)氏族はトゥラチャン(Tulachan)氏族、チョエキー(Choeki)氏族はゴウチャン(Gauchan)氏族に改名した。セルチャン氏族の氏神ガンラサルキーカルポ(Ghanlasarkikarpo)はナルシン(Narsing)、バタチャン氏族の氏神ヒワランジュング(Hyawaranjung)はバイラブ(Bhairab)、トゥラチャン氏族の氏神チリン・ギャルモ(Chhirin Gyalmo)はグラハ(Graha)、ゴウチャン氏族の氏神ラングバ・ヌルブ(Langba Nhurubu)はガネッシュ(Ganesh)へと、祖先神までもチベット風の神々が、ヒンドゥー風の神々の化身として考えられるように変化させた[飯島1966: 352]という。この社会構造のヒンドゥー化推進は、ネパール社会への構造的同化(structural assimilation)といえる。

タカリーのこのような文化変革は、人口が少ないためより劇的に進行する。タカリーの塩の交易の成功のかけには、ヒンドゥー的価値観に挑むインプレッションマネージメントの実践とたゆまない努力があったとみられる。

しかし、タカリーの上層部が推進した脱チベット化、ヒンドゥー化は、タカリー社会の中でなくなり受け入れられたわけではなかったと考えられる。あるタカリーは、そんな変化が激しいタカリー社会と文化について自嘲気味に「タカリーは柔軟性がありすぎたんだよね」とつぶやいた言葉が今

(27) 居住地域に対しパハディ(Pahadi)とマデシ(Madeshi)という分け方ある、パハディとは、丘陵地帯出身者で、マデシはタライ平野出身者をさす。パハディは、カースト制度を持つパルパテといくつかのエスニック・グループから構成され、全人口の6割以上を占める。

(28) 名乗る現象の一つをビスタは、「部族名がないので

パーラガオンレと呼ばれており、他のヒマラヤ山住民が嫌うように、彼らもボテと呼ばれるのをいやがる。実際、他の人びとさえよければ、グルン族と呼ばれたいとさえ考えている」[Bista1980]と記す。グルンがグルカ兵などの徴用に有利として、人口調査際にグルンを自称し登録しようとする人々がいる。



も忘れられない。

タカリーは、社会内部と外部の二重の境界に対する対応を必要としてきた。タカリー社会の外部の境界は、ヒンドゥー的価値観に基づくネパール社会、さらに今日のグローバル化の広がりにより幾重にも重なっている。

### 3. エスニック境界の拡大

1990年の民主化後、タブー視されていた人権や民族問題がネパールのマスメディアでも取り上げられるようになり、政府やNGOの活動が拡大する契機となった。各民族が自らの権利と文化を主張するようになる。

ネパール社会の中で山岳のチベット系、モンゴロイド系住民に対するカースト・ヒエラルキーからくるまなざしの影響は大きく、ネパール社会の中で自らの存在を他者によく見せようと上位の民族名称を名乗る現象はしばしばみうけられる。その結果、タカリーの民族範疇は、研究者だけでなく様々に混乱と議論を招いてきた。

タカリーは人口一万人前後であり、タカリーのもつ文化・社会システムは、他のチベット系の人々と同様に、チベット、ネパールの二つの文化に関係し影響にさらされることで構築されてきた。タカリーをネパール国内において実権を持つヒンドゥー系の人々の文化・社会システムに影響され続けるマージナルな存在として位置づけることも

でき、タカリー社会・文化の動態は、しばしばネパール化（ヒンドゥー化、サンスクリット化および近代化）として議論されてきた。

記述対象の限定は、あらゆる民族誌において必須であるが、タカリーの場合、文化人類学的報告のなかで明確に結論が出ない、出せない課題として自戒を込め、何ともすっきりしない断り書きが導入部で必ずといってよいほど登場する。

タカリーとは、ネパール語でタッ (*Tha*) の人をさし、チベット語ではタクパ (*Thak pa*) と呼ばれる。もともとタッコラ地方に居住している人を広範囲にさす言葉でしかなく、明確な民族区分を指してはいない。当時タッコラ地方は、拡大するネパールの一部ではなく、チベット、ムスタン王国とネパールの両国に接する境界にあった。タッコラ地方の人々の文化と歴史の複雑さは、生態学的環境の影響、歴史政治上、この地域がチベットとネパールのボーダーランドだからである。タッコラ地方がネパールに組み込まれる過程でどのようにエスニック・グループが形成され、それぞれの境界が構築されていったかは、想像するしかない。その結果複数のタカリーと名乗る集団が存在することになった。

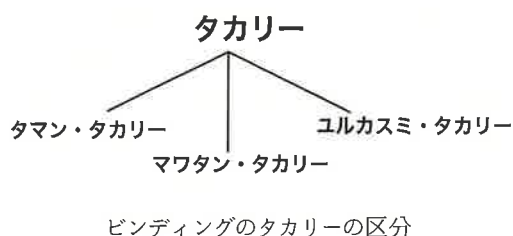
フューラーハイメンドルフ [Fure-Haimendorf 1975] やビスタ [Bista1980] は、マルファの人々がタカリーを自称することにふれ、別の民族集団として扱っている。

| 現象の区分           | Tradition |             |                         |       |       | Thekalization           |           |             |
|-----------------|-----------|-------------|-------------------------|-------|-------|-------------------------|-----------|-------------|
| 地域の区分           | タクサットサエ   | パンチガウン      |                         |       |       | ○○・タカリー                 | —         | —           |
| 集団の区分           | タマンタカリー   | マルファの人      | ティンの人                   | チバンの人 | シャンの人 | キャバ・キャブシャまたはアーンダ・バンダの子孫 | チベット難民の人々 | その他のジャナジャティ |
| M.Vindingの区分    | タマン・タカリー  | マフンタン・タカリー  | ユルカスミ・タカリー              |       |       | —                       | —         | —           |
| NEFINの登録区分      | タカリー      | マルファリ・タカリー  | ティン・ガウレ・タカリー (ユルカスミバイミ) |       |       | —                       | —         | —           |
| 名称(自称)          | タマン、タバン   | —           | ティニ                     | チバン   | シャン   | —                       | —         | —           |
| 名 称 (タカリー以外の他称) | —         | ブンネル、ブンデン   | ティンネル                   | —     | シャンタン | —                       | —         | —           |
| クラン             | 4つ        | 4つ          | —                       | —     | —     | —                       | —         | —           |
| 社会組織            | タカリー民族協会  | マルファ・タカリー協会 | —                       | —     | —     | —                       | —         | —           |

タカリーの民族範疇

NEFIN (*Nepal Federation of Indigenous Nationalities*: ネパール先住民族連合) は、タカリーとしてタクサットサエのタカリーの登録以外に、マルファの人々をマルファリ・タカリー (*Marphali Thakali*)、マルファ以外のバーラガオンのタカリーをティン・ガウレ・タカリー (*Tin Gaule Thakali*)<sup>(29)</sup> と登録している。

タカリーは、ビンディングによると3つの別々の民族集団の総称であるとされ、タマン・タカリー (*Tamang Thakali*)、マワタン・タカリー (*Mawatan Thakali*)、ユルカスミ・タカリー (*Yhulkasompaimhi Thakali*) として拡大される。ビンディングの分け方は地理的区分と言語的区分を意識したものである。

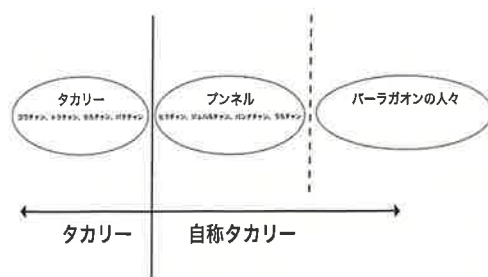


タマン・タカリーはタクサットサエに住む人々、マワタン・タカリーはパンチ・ガウンの特にマルファに住む人々。ユルカスミ・タカリーはパンチ・ガウンのティニ (*Thini*)、シャン (*Syang*)、チバン (*Chhimang*) に住む人々である。

しかし、筆者はビンディングによるこの三つの区分を現地の人々の口から直接聞いたことがない。タカリーの三つの区分と各名称を「現在人類学者によって一般に受け入れられた」[Vinding 1998: 22]と主張しているが、「その地域で使われていた用語を組み合わせ、区分のために便宜的に利用したものと推察される」[伊藤2005: 269] という指摘にあるとおり、使用を疑問視する声もある。さらに欧米の研究者、日本の文化人類学者の間でもそれほど使用されておらず、筆者が調べ

る範囲ではあまりこの呼称と区分はビンディングがいうほど流通していない。

タカリーの民族範疇について、三つの区分の総称をタカリーとするビンディングの立場の他に、フューラー・ハイメンドルフ [Fure-Haimendorf 1975] やビスタ [Bista 1980]、バーバラ・パーカー (*Parker, Barbara.*) [Parker 1988]、マンザルド (*Manzardo, Andrew E*) [Manzardo 1982]、メッサーシュミット (*Messerschmidt, Donald A*) [Messerschmidt 1982] は、タカリーをタクサットサエ、四つのクランに属する人々のみを基本とするという立場をとる。タカリーの民族的範疇は振幅があるにもかかわらず、多くの文化人類学者らが同じ立場を採用している。



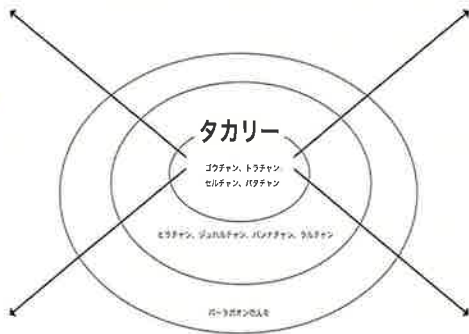
ハイメンドルフらのタカリーの区分

ビンディングは、タクサットサエ (ビンディングの区分では、*Thamang Thakali*) が、「他のネパール人や文化人類学者に自分たちだけがタカリーであるという主張を認めさせた」[Vinding 1998: 20]と、民族誌の記述が、タクサットサエの住民だけをタカリーとする主張を後押ししたと、文化人類学者の行為を激しく批判する。しかし、ビンディングの1970年代の著作ではタクサットサエのみをタカリーとして扱っており、後年の研究と比較してもビンディングのタカリーに関する民族的範疇は矛盾が見られる。筆者がフィールドで出会ったビンディングのリサーチアシスタントであったタカリーはビンディングをはじめとする文化人類学

(29)山のタカリーの意味。

者の使用するタカリーの民族範疇の混乱にしばしば苛立ちの態度を見せていた。

飯島 [飯島1982] や高山 [高山2000]も、タカリーを原則的にタクサットサエ、四つのクランに属する人々としながら、他の民族がタカリーと名乗るタカリー化、すなわちエスニック境界が拡大する現象の存在を肯定的に認め、それらの人々を含めて広義の意味でタカリーとして扱っている。



飯島・高山のタカリーの区分  
(*Thakalization*)

近隣の民族集団以外にもタカリーのネパール国内での経済的成功と社会的地位の高さにあやかり、タカリーを自称する人々が拡大し、エスニック境界の拡大は、ますます進み、「大タカリー化 (*Thakalization*)<sup>(30)</sup>」呼べる現象が生じている。

しかし、タカリー民族協会 (*Thakali sewa samiti*) は、原則としてタカリーは、4つのクラン、ゴウチャン (*Gauchan*)、トラチャン (*Tulachan*)、セルチャン (*Sherchan*) とバタチャン (*Bhattachan*) のうち1つに属し、この姓を持つ者がタカリーであると定義し、自分たちこそ、本来のタカリーであると主張する。

#### 4. エスニック・アイデンティティと民族範疇

このタカリーを取り巻くエスニシティの状況と問題をエスニシティ概念規定に戻す。エスニ

ック・バウンダリー (*ethnic boundary*) を考察したバルト [Barth1969: 10-11] によるとエスニック・グループとは、生物学的に自己永続的で、基層的文化価値観を共有し、コミュニケーションや相互行為があり、他者との明確な区別の範疇があり、共有されている集団であるとしている。イサシヴ [Isajiw1974] は、エスニシティの客観的定義のための要素について、12項目以上述べている。なかでも共通の出自、同一の文化、宗教、人種、言語などは、従来「民族」をはじめエスニック・グループを特定区別する生態学的、社会学的な要素として用いられてきた。しかし近年個人の内面的過程や主観的な帰属意識を重視する傾向が見て取れる。

これは、同類意識、共同体的感情、共通の価値などの心理的側面を重視し、特に文化人類学の中ではニュー・エスニシティ論として積極的に議論されている。ネパール地域研究においても「名づけ」と「名乗り」にまつわる詳細な事例の検討を通してエスニック・アイデンティティとエスニック・バウンダリー考察されている<sup>(31)</sup>。

イサシヴ [Isajiw1974] は、エスニシティの問題を内部と外部の境界の問題としてとらえ議論しているが、内部と外部の境界については既に記したタカリーの歴史的変遷と現在の状況で示したように、決してそれぞれが単数ではなく、複雑に絡み合っている。エスニシティの問題を考える根底として、バルト [Barth1969: 14] の示唆は有効である。バルトは、文化的な特質は、集団内部でもその境界でも変化することを示し、その文化に属する人と属しない人との関係性を検討する必要性を示唆した。

タカリーは、複数の文化的状況下の接触の中で同化や文化変化を迫られ、あるいは起こしながら異文化適応を行ってきた。タカリーのエスニシティの問題を理解するには、エスニシティ

(30) タカリーを名乗る人々の増加を意味する造語。

(31) ネパール地域研究に限れば名和克郎のビヤンス (

*Byans*) の一連の研究 [名和2002] 佐藤齊華によるヨルモ (*Yolmo*) の研究 [佐藤1998] などがある。

のしたたかな持続と更新の実態を明らかにしていく必要がある。

「タカリーとは誰なのか?」というタカリーの民族範疇は、歴史的な経緯と議論の余地があることを認識できるが、その複雑さから安易に答えは導き出せない。そのため誰がタカリーなのかは、研究者だけでなく現地の人々にとっても大きく相違があり、政治・社会と深く関わり今後も個別の事例を重ねていく課題である。

## V. おわりに

近年文化人類学の研究の多くから、一般にマイノリティは抑圧されてばかりの弱い存在として大きな力に吸収されてしまうと思われがちではあるが、近代世界システムとの関係や植民地の歴史的研究によって、マイノリティとされる人々は必ずしも大きなシステムに取り込まれるのではなく、抵抗を試み、ブリコラージュ的な変換を通して自文化の中に取り込むしたたかさを持つことが報告されているし、エスニシティの視点でとらえエスニック・グループの境界を精緻に見つめるならば、決して境界線自体も明確なものではないことが理解できる。エスニシティの問題の検討は、集団内部は均質ではなく様々な立場や様々な人々が存在し、時には葛藤を抱え日々やり取りをしている動態的な集団と捉えられる試みといえよう。

ネパールは、多文化、多民族の社会ではあるが、他の民族文化に対する理解度はとても低い。今後よりいっそうフィールド調査に基づいた個別の事例研究は、ますます重要性を増すのである。

### <参考文献>

綾部恒雄

『現代世界とエスニシティ』弘文堂、1993、  
Barth, Fredrik

Ethnic Groups and Boudaries Little  
Brown 1969,

Bista, Dor Bahadur

People of Nepal Ratna Pustak Bhandar

1980, 『ネパールの人びと』日本ネパール協会  
編 田村真知子訳 増補新装版古今書院、1993

Fisher, William F.

Fluid Boundaries Forming and  
Transforming Identity in Nepal Columbia

University Press 2001,

Fure-Haimendorf, Christoph von

Himalayan traders : life in highland Nepal

J. Murray, 1975,

Gordon, Milton

Assimilation in American Life

Oxford University Press 1964

Hagen, Toni.

“The Kingdom in the Himalayas” 1980

町田靖治訳『ネパール』白水社、1990

日隈信夫, 日隈健壬

「ネパールにおける観光開発と文化財保存に関  
する研究ノート(2)ーネパール経済における観  
光産業の動向ー」『広島修大論集第39巻 第1  
号(人文)』広島修道大学人文学会

1998、pp. 367-391

飯島茂

「中部ネパールのタカリー族(Torbo民族誌一  
その1)」『民族学研究』日本民族学会、第24巻  
第3号 1960、pp. 175-196

「「ヒンドゥー化」についての一考察(人間)」  
人類学的研究『人間』中央公論

1966、pp. 343-355

「民族の運命 ネパールヒマラヤのタカリー族を  
めぐって(ジャーナル文明論評)」通『通産ジャー  
ナル』10(4) 商産業省通商産業調査会、1977、  
pp. 66-72

『ヒマラヤの彼方から ネパール商業民族タカ  
リーの生活誌』日本放送出版会、1982

Isajiw, Wsevolod W.

Definitions of Ethnicity. Ethnicity 1 (2)  
Academic Presspp. 1974, pp.111-124

伊藤ゆき

「タカリーの社会変容」石井溥ほか編著『流動するネパールー地域社会の変容』東京大学出版会、2005、pp.267-302

河口慧海

『チベット旅行記』高山龍三校訂、講談社学術文庫版、1978

鹿野勝彦

「登山・観光」石井溥編『もっと知りたいネパール』弘文堂、1986、pp.269-288

Manzardo, Andrew E.

“Impression managent and economic growth : the case of the Thakalis of Dhaulagiri zone” Kailash 9-1 Ratna, 1982, pp. 45-60

Messerschmidt, Donald A.

“The Thakali of Nepal : historical continuity and socio-cultural change”

Ethnohistory 29 (4) 1982, pp.265-280

Messerschmidt, Donald A. and

Gurung, Nareshwar Jang.

“Parallel trade and innovation in central Nepal : The cases of the Gurung and Thakali subbas comparsd” Contribution to the Anthropology of Nepal Pilgrim, 1974, pp.197-221

南真木人

「在留ネパール人労働者のエスニック・コミュニティとネットワーク」庄司博史・三島禎子編『国際移民の自存戦略とトランスナショナル・ネットワークの文化人類学的研究』国立民族学博物館、2003、pp.85-108

森田剛光

「タカリーによるミドルマン的経済実践～19世紀から今日まで」京都文教大学大学院修士論文

2004

「民族共同体をになう社会組織の役割の位相-ネパール、タカリー社会の事例-」『名古屋大学大学院比較人文科学年報』vol. 5 2007、pp.155-169

森本泉

「ネパール・ポカラにおけるツーリストエリアの形成と民族「企業家」の活動」『地理学評論』vol. 71-4 理想社、1998、pp.272-293

名和克郎

「カーストと民族の間」石井溥編『暮らしがわかるアジア読本ネパール』河出書房新社、1997、pp.46-54

『ネパール、ビャンスおよび周辺地域における儀礼と社会範疇に関する民族誌的研究：もう一つの「近代」の布置』三元社2002.2

西澤憲一郎

『ネパールの歴史 対インド関係を中心に』勁草書房1985

Parker, Barbara

“Moral economy、political economy、and the culture of entrepreneurship in highland Nepal” Ethnology Vol. 27. No. 2 1988, p.181-194

佐藤齊華

「民族の2つの顔--北東ネパールの「ヨルモ」をめぐる議論と実践の多層性」『民族学研究日本民族学会』1998 63 (1) pp.73-95

高山龍三

「河口慧海のおもい一大王への献上一切経調査・一九九九年ネパール報告」『黄檗文華』黄檗山萬福寺文華殿 第一九九号（一九九八—一九九）2000 pp.21-34

月原敏博

「ヒマラヤ地域研究の動向と課題ーその人間地生態の把握と地域論の構築に向けて」『人文地理』第51巻6号1999 pp.41-61

Vinding, Michael



"Making a living in the Nepal Himalayas :  
the case of the Thakalis of mustang  
district" Contributions to Nepalese studies

Vol. 12. No. 1 Pilgrim 1984, pp. 51-105

Lha phewa : the Thakali 12-year festival

Ratna 1992,

THE THAKALI A Himalayan ethnography

Serindia 1998,

Vinding, Michael and Bhattachan, Krishna  
Bahadur.

An annotated bibliography on the

Thakalis" Contributions to Nepalese Studies

Vol. 12 No. 3 Pilgrim 1985, pp. 1-23